

ヴェラ・ファールバーグ [著]

御園生直美ほか [監訳]

社会的養護における子ども支援テキストブック

——子どもが育つ旅路をとらえ

誠信書房・B5判並製

2024年6月刊行

3,960円 (税込)

評者＝尾谷 健(横浜いずみ学園)



社会的養護施設で子どもに会っていると、「なぜ施設にいるのかかわからない」と子どもが言うことがある。入所時に自分で話をした入所理由についても、「入るために必要だから言っただけ」と言うこともある。また、いくつかの社会的養護を経験してきた子どもや、一旦家庭に戻った後に再び保護されて、社会的養護施設に入ってくる子どもの場合には、最初に保護された時に親と児童福祉司はどのような話をし、親はどのような思いだったのか、家庭に戻る際にはどのような話し合いがなされたのか、そういったことがわからないことがある。そのため施設職員として子どもと会っていて、子どもは入所していることや家庭に対してどのような思いを抱いているのか、思い描くのが難しいことがある。

本書には、社会的養護に来るまでのプロセスに沿って、その時々の子どもの思い、支援者に期待されることが描かれている。例えば4章「移動のトラウマを最小限にする」では、移動に関しては「関わるすべての人が子どもに対して配慮しつつ率直かつ正直であること」や「分離に対する子どもの反応を慎重に見守ること」の重要性を指摘している。さらに幼児の場合には、移動の前後に起きた出来事を記録して残しておくことの必要性も指摘している。本書を読むことで、移動に関わる人の思いを記録し、次の支援者につないでいくことがいかに重要であるか理解することができる。

本書の特徴はまた、事例が豊富に載せられていることである。小児科医かつ心理療法士であり、宿泊型療養施設の医長を務めた経験もある著者は、長年にわたり、問題がある子どもたちとその家族への支援に携わってきた実践家である。事例を読むだけでも学びになるが、取り上げられている対応例は、長年の経験から導き出された、具体的で、すぐにでも使えるものである。そのため、本書は、社会的養護の子どもたちと生活を共にする支援者や、支援に携わりたいと思っている方

にも、大変役立つものとなるだろう。

著者は、子どもだけでなく、実親や里親への支援も重視している。本書の事例では、非常に危険な問題行動をする子どもたちを、里親が、支援を受けながら何とか支えようとする様子が描かれている。近年日本でも、里親への委託が推進されるようになっているが、里親の支援を充実させていくことも重要だろう。日本の社会的養護が変動している現在において、本書が翻訳、出版されたのは、とても意義深いことだと思われる。

●原書: Vera Fahlberg : A Child's Journey through Placement.